

# はじめに

この教科書は「子ども」と触れ合うすべての人、子どもにかかわり、子育てを支援する専門家を目指す人たちに必要な、広範な知識（文部科学省—教育心理、厚生労働省—保健、保育）の最新の情報を含め、まとめたものです。保健師、看護師、幼稚園教員、保育士、子ども心理士などの方々はもちろん、医師が、お互いにかかわりあう知識をまとめて学んでいただくのに有用な教科書として、長年好評を博してきました。

平成15年（2003年）に「最新小児保健」として初版を発刊、平成25年（2013年）にタイトルを「最新子ども保健」と改め、発刊致しました。続刊として第7版となる今回は、各章を最新の情報に更新したのはもちろん、とくに、以下のバージョンアップを行いました。「第3章 子どもの栄養と食生活」では「2. 子どもの時期の食事摂取基準」をよりボリュームアップし、詳細に記述しました。また、「第4章 子どもの心理、知能、情緒、社会性の発達とその保健」では「6. 社会的問題」にインターネットやスマートフォンについて加筆しました。また、第5章に近年診断の増加とともにその対応のあり方が問われている「発達障害」の項を増設しました。「第6章 日常生活と環境」では、「2. 子どもの環境」として家庭、保育所・幼稚園、学校、対人関係、メディア環境等を整理して記載しました。また、「3. 子育て支援」についても最近の地域の行政的な支援事業を紹介しました。「第7章 小児在宅医療」も新たに設けた大きな目玉の項目です。「第12章 事故とその対策」では「心肺蘇生法」の項を追加しました。

以上のように、本書は、今年で開講110年となる京都府立医科大学小児科学教室で育ち、医療・医学研究はもとより、教育、療育、行政らの各分野の第一線で活躍する小児科医であり、各所のエキスパートがその能力と熱意を傾けて執筆した小児保健教科書の決定版です。

「少子超高齢化時代」と言われますが、高齢者の比率が極端に高い時代はやがて終わりを迎えるでしょう。高齢者になってから対応するのではなく、胎児期、乳幼児期から、子どもとその保護者のところとからだの健康をいかに保つか、病気や障がいを持った人々とその家族をいかに支え、ともに生活できる社会を構築していくか、それらを皆で前向きに考えていくことが、すべての人にとってのよりよい未来の社会づくりにつながることに今、皆が気づき始めています。今後も「小児保健」の考え方やその取り組みは、ますます重要となり、その必要性と評価は高まり続けることでしょう。

最後になりましたが、初版より、本書の作成に指導的役割を果たしてこられた澤田 淳 京都府立医科大学名誉教授に心からの敬意を表し、前版の「はじめに」の最後一文を引用させていただき、本版「はじめに」の結びに代えさせていただきます。

「この本を使用された皆さんが目的への道を選択して、『子どもたちに笑顔を、親に微笑みを』与えていただくようお願いします。」

平成29年11月吉日

細井 創